

新住協総会・報告

住まいの雑誌Replan・三木奎吾

総会前夜祭



5月20日は昼過ぎに仙台へ移動。飛行機に乗ったあたりから、顔見知りのみなさんと遭遇。今日明日と開催される新住協の総会に 北海道から参加されるみなさんたちです。ことしの開催場所は東北仙台、会場は松島であります。年に1度、代表理事の室蘭工大・鎌田教授の研究発表も行われ、全国から多くのメンバーが集います。で、20日は「前夜祭」ということで仙台は国分町で食事会でした。

この1年間でも全国でいろんなみなさんとの交流もあり、あちこちで歓談がとぎれることがありません。新住協は、ご存知のように高断熱高気密住宅の家づくりの 実践的な活動を続けてきている全国組織。大学研究機関・工務店・設計事務所・設備機器メーカーなど、さまざまなたちがひとつの目的、省エネで快適な家づくりをめざして活動している団体です。わたしどもで発行している「エコ住宅Q1.0」という本は この新住協の全国での活動を伝え、

協同を働きかける役割も持っています。いま、省CO2・省エネが緊急の課題になってきてこの高断熱高気密技術は、時代が求める基本技術となってきました。

仙台は、東北ではありますが 気候が温暖な地域であり、これまで新住協メンバーが比較的少ない地域。にもかかわらず、きのうの前夜祭にはなんと、121名の参加ということ。21日からの総会には、総勢で280名の参加という発表が行われました。仙台というメンバーの少ない地域での開催にもかかわらず 過去最大規模の参加者数ということだそうです。特に最近、関東以西のいわゆる「温暖地」でのメンバーが急増を見せており、適正なコストで高断熱高気密住宅を建てられる この技術の広がり、大きな期待感を持って進んでいると言えます。

新住協総会2010



5月22日金曜日からの新住協総会。前の晩21日の仙台市内での前夜祭から始まって、金曜日の総会、懇親会 さらに、翌日は住宅現場見学会と、たいへん盛りだくさんの内容で推移していました。

新住協の総会は、毎年この時期に開催されています。会場はだいたい、前年の総会の締め頃に「じゃあ、来年は◎◎でやりましょう」というような声で開催地が決定していきます。

ことしは仙台ということで、名勝地の松島で行われました。ちなみに来年は「関西でやりましょう」という声が聞かれましたが、全国的に見て、関西は高断熱高気密住宅がもっとも普及していない地域。むしろ九州とか、山陽地域の方が動きがある。なので、むしろ、そういう地域にも運動の輪を広げていこうということが大きな意志として示されたということも出来るでしょう。

木曜日の前夜祭に続いて、みなさんしっかり体力を温存して松島のホテルに続々と集合されてきます。今回の参加総数は280名以上ということ。午前10時から約1時間ほど、NPO組織としての総会が行われ、ことしの運動の大筋が了承されて、無事原案通り採択。ことしは、国交省の補助金事業に応募している案件があり、もしそれが採択された場合、動きがあり得る旨の発表もありました。最近はこうした案件への対応が必要になってきている部分もあります。しかし、これはあくまでも採択されたら、というものなので、なかなか見通しが利きにくい部分があります。取材をしても、全国でさまざまな事業体、組織が応募していますが、その採択基準についてはよく説明を聞いても、理解しにくい部分もあります。まあ、動きが出た時点でまた、お伝えしたいと思います。

総会の終了後、引き続き代表理事・鎌田紀彦室蘭工大教授の基調講演に。今回の講演では、ドイツでの「パッシブハウス」基準について、その基本的なスタンスが、新住協のQ1.0プロジェクトとほぼ同様の立場から取り組まれてきているものであることが基本認識として示されていました。省CO2という基本的な世界的課題について、建築環境性能の立場から考察を進めていけば、自ずとたどりつくスタンスという意味から、その置かれている気候条件的な違いがある中で、結論としては、ほぼ同様の考え方で住宅づくりを考えてきている。というように報告がされていました。ただし、ドイツは国全体が、ほぼ日本の1地域から2地域に相当するエリアにすっぽり入っていることから、比較的単純な枠の中で収められるという側面があるということ。また、基本的に暖房設備として温水輻射暖房が標準装備されているという国民的共通認識が基盤として存在しているようです。日本では、気候環境的に1地域から6地域まで亜寒帯から亜熱帯まで幅広い地域に入っているのですが、ドイツは、北

海道北部・東部までは低温ではないけれど、東北南部地域以南のような温暖地域でもない。ちょうど秋田よりももう少し寒い、っていうような気候条件が全国的にほぼ共通しているということだそうです。

こうした認識に立って、新住協としては、ドイツパッシブハウス運動と国際的に連携していく方向で、鎌田教授がことしのドイツでのパッシブハウス世界大会に出席し、提唱者とも会合を持って来る、という報告がされました。日本の住宅関連機構組織が、ドイツパッシブハウス運動とはやや距離を置いている中で、そういう現状を打開する動きとして注目されるどころです。

QPexがバージョン3にアップグレード



新住協総会報告その2であります。学生時代以来、きちんとした講義形式のお話を聞くのはどうも苦手なのですが、でも自分の仕事に直結するとなると人間、不思議と眠たくならず聞いていられる。新住協の総会では、基調講演に引き続いて室蘭工大・鎌田教授による、先生の研究室での一年間の研究成果の発表が行われます。主には、熱計算ソフトQPexがバー

ジョン3にアップグレードして 冷房負荷計算にも対応した点の説明が前段で行われていました。暖房と違って、冷房は本来、「全館冷房」という概念はないと思うのですが、住宅性能を把握するためには 基本的には全館冷房を前提にして負荷計算されています。このQPexは、エクセルをベースにして 全国の都市の気候数値をあらかじめ計算式として取り込んであり、使用する建築材料を入力していくことで 必要な熱量計算が出来るように考えられています。直感的な操作感覚があり、わたしのような非工学系のものにも 「ちょっとはさわってみようかな」という気分にはさせてくれるもの。そうでありながら、この手のソフトとしてはきわめて安価であり、新住協メンバーだけに限らず、全国的に利用者が増えています。目に見えにくい、熱環境を数量的に目に見えるようにするソフトとして 家づくりの担い手が顧客に対して、数字をきちんと語れる基礎として このソフトの利用価値は極めて高いと言えるでしょう。

しかし、こういう研究機関と全国の住宅建築の最前線が 直に結びついていて、先生の講演にいろいろな質問や、事例研究が随時入りながら、わかりやすく、しかも実践的に最先端の知識・現場感覚が得られるという 当たり前なようで、実はきわめて稀有なやり取りが続きます。

研究機関としての学問の府が、このように平易に、業界に飛び込んで実地的に研究を続けるという意味で、新住協運動の本質的な価値がこういうところにあると実感できます。

冷房負荷への対応策



今回の総会では、冷房負荷への 熱計算ソフトQPexの対応が大きなポイントだったわけですが、会場での協賛メーカの展示でも そういった商品が見られました。 これまでも「ハニカムサーモスクリーン」で よく利用されてきているセイキから出荷された「外付けロールスクリーン」です。 窓から太陽光が熱となって室内に取り込まれる部分は、 室内側で遮断しようとするよりも 外側で遮断した方が遙かに効率がいい。 ヨーロッパでは、そういうことから「オーニング」が デザインもバリエーション豊かに採用されている例が多い。 それに対して、日本は伝統的には屋根の軒の出が 建築装置として、そういう役割を担ってきたと言えるのですが、敷地の狭小化がどんどん進行し、そもそも軒の出が省略されるような方向に進展してしまっ て そういった「日射遮蔽」手法が日本の建築から失われてしまった。 なので、いまや、庇もない窓からどんどん日射が室内に入り込み、 たとえカーテンで遮蔽しても、カーテンと窓面との間に 高熱の熱空気だまりが出来て カーテンの開放とともに、室内気温を上昇させる。仕方なく、冷房をガンガン使用する。 っていうような住宅がたくさん建てられているわけですね。そういう状況に対して、 素材を考え、ローコストで室外側で遮蔽できるように工夫したのが この外付けロールスクリーンということです。 内部遮蔽では45%の日射熱カットなのに対して この方式だと、70%のカットが可能というように表記されています。本来であれば、各窓の上部に庇が付けられるのがいいのですが、 ひとつのアイデアとしては、いいのではと思いました。

新住協とシロアリ問題



シロアリ問題って、高断熱高気密を基本とする寒冷地住宅にとっては なかなか実感の持てない問題です。とくに北海道ではあまり聞くことはなく、どうもイマイチの問題意識であることは否めません。しかし、北海道発の住宅研究組織ながら、最近の新住協大会では、このテーマで研究が行われてきています。特に基礎断熱材をシロアリが食害するという結果が見えてきて どのように対策すべきか、真剣に討論してきています。去年は、自らシロア리를飼って、その生態を研究するという 強者も現れて、盛り上がっていました（笑）。建物へのシロアリの食害をストップさせた上で 写真のようなシステムを敷設するのが基本と言うことになります。以下、HPからの抜粋

セントリコン・システム 習性を利用した新発想の防除工法。巣ごと退治するシステムです。いままでの工法は対症療法。根本的な防除はできません。床下に防蟻剤を散布するのがいままでの防除工法。シロアリが家屋に侵入しないようバリアをつくる工法で、根本的な防除法ではありません。地中のコロニー は温存され、防蟻剤のバリアに隙間ができると再び侵入する危険性があります。そんな従来工法の問題点をクリアしたのが、セントリコン・システム。シロアリの習性を利用して巣ごと退治する防除法です。

ということなのですが、問題は建物の方の防蟻対策です。断熱素材を防湿をしっかりと考えガラスウールに替える、というのが基本対策。基礎の作り方については、ことしも大変重厚な対策が検討されていました。その上、京都大学との産学共同研究実験も取り組まれていてその実験結果なども発表されていました。しかし、相手は先史時代から生き残ってきたという強者。また、木で家を造るという人間にとって いわば最強の敵であります。対策はそれこそ、人類共通の戦いだと思います。心して、掛かっていかなければならない重要テーマだと思えます。

法務大臣政務官・中村哲治さん



写真は、新住協総会懇親会の最後の方に公務を終えられてから 参加された、法務大臣政務官の参議院議員・中村哲治さんです。氏は、個人の資格で新住協の会員になられていて 昨年にも、総会に出席されていました。昨年のご存知のように「野党議員」としての立場での参加でしたが、ことしは、与党になり、政府の一員として 法務省の三役の重責を担われています。

そういう公務もあるので、多忙を極められている中、それも仙台・松島という、氏の選挙区・奈良とは 東京をはさんで正反対の方角での開催ですが、わざわざ参加いただきました。氏は、一昨年からわたしどものReplan誌を大量に購入いただき、高断熱高気密の新住協運動に深く共感され、大量に購入した雑誌を仲間の議員さんたちに配っていただいています。そういうことから民主党の住宅政策の起案者としても 新住協の目指す方向や、わたしたち北海道が取り組んできた「北海道R住宅」などの動きを 大きな政策方向として取り込んでいこうと努力されています。スピーチでは、こうした政策方向についての発言もあり、会場から大きな共感を持って受け止められていました。その後、2次会・3次会と意見交換も出来て その方向性を確認することが出来ました。

